



Title	ことば
Author(s)	ムハンマド, サラーフッディーン
Citation	印度民俗研究. 1976, 3, p. 22-24
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/50338">https://doi.org/10.18910/50338</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## こ と ば

ムハンマド サラーフッディーン

インドがイギリスの支配下にあった頃のこと。出生の地はビハール州シャーハーバード県のある小都市。家は市の中心からはずれたところにあり、家業はザミンダールであった。子供の頃は屋敷の外へ出ることは許されず、時折、父や家庭教師に連れられて自家のマンゴー園に行く時しかいわば外の世界に触れる事はなかった。徒歩で約半時間程の道程である。途中、一部は人家の立並んでいるところを通り、一部は灌漑用水路沿いの舗装道路を通ることになっていた。その人里はわが家の小作人たちの住むところであったが、恐らくその人たちと言葉を交すしきたりにはなつていなかつたのであろう。ただ挨拶を受けるだけであった。私が言葉を交すのは両親や兄弟、親戚の者、それにマウルヴィーとの間に限られ、その中ではマウルヴィーと一緒に過ごす時間が一番長かつた。マウルヴィーは屋敷の一隅に住みこんでおられた。今になって思えば、この先生は子供たちに教育を授けるばかりでなく、しつけをつけることまで仕事にしておられたわけである。ウルドゥー語、ペルシア語、アラビア語、さらには英語の読み書きばかりでなく、数学や歴史、地理といったものまで。休み時間には私たちと一緒に遊んでおられた。

子供時分の勉強のことで今日感じることは言葉の勉強に随分悩まされたということである。母語はといえばウルドゥー語であるが、ペルシア語にもかなりの時間を割かねばならなかつた。ムガル朝時代の名残りといえよう。家庭教師の先生をマウルヴィーと呼んだが、先生はアラビア語も教えて下さった。イスラム教徒としてアラビア語を習わねば『クルアーン』(コーラン)が読めぬ。更には英語。英國統治下のことである。小学校に通学しなくともよかつたので、小学校までの教育は家庭でこの先生に授けていただいた。中学に入るとウルドゥー語のほかペルシア語と英語を習うことになっていた。中学から高等学校を終えるまではウルドゥー語とペルシア語の勉強のことで家庭教師の叱責と鞭に耐えねばならなかつた。

大学予科までは故郷の街で教育を受けたが、その後は異郷へ出てみたくなつたので、カルカッタへ出た。カルカッタ大学に入学した。カレッジの授業は普通、英語で行われていた。しかし学生の大半はベンガル語を母語としていたので、彼等と親しくなるのにベンガル語をおぼえねばならなくなつた。それと同時に当時のマドラス州から来ていた幾人かの学生は私にテルグー語を教えてくれるようになつた。オリッサ出身の学生はオリヤー語を習うようにすすめるし、アッサムの学生は上品な言葉だからアッサム語を習えという。更には、パンジャーブ出身の友達はなぜパンジャーブ語を習おうとしないといつてとがめる。まるで「インターナショナルな」雰囲気のクラスであった。このような調子で言葉に追われていたら頭がおかしくなるのではないか。それに他の学科目の勉強もおそろかになるのではないか。私は不安になった。そこでそれからはそのような誘惑に対しては

きっぱりと断りを言うことにした。しばらくの間は皆は私をなじっていたが、ついにはあきらめ、憐みを感じるようになり、放免してくれた。私はほっとした。二ヶ年がこうして過ぎ去った。

その後私は東パキスタンへ移り、ダーカー（ダッカ）大学に入学した。ダーカーでは学生の大多数はベンガル語を話していたので、まずは言葉で困ることはなかろうと安堵したのであった。ところがすぐに遠慮のない間柄になつたとたん、仲間たちは私のベンガル語を批評するようになつた。やれ、「そのことは印度のベンガル語で使うものだ。」とか、「これはパキスタンのベンガル語では使わぬものだ。」といった調子である。結局、新しい「語彙集」を編まねばならなくなり、ダーカーのベンガル語を勉強することになった。二年間がどうにか過ぎ去った。

これで言葉の勉強から解放されたと安堵の吐息をついたのであった。ところが、そこへ今度は日本へ行かねばならなくなつたことを知らされた。外国のことだし英語ですべて用は足りるだろうと考えた。ところが日本に着いてみるとなんとここは全くの別世界。土地の言葉ができなければコップ一杯の水にもありつけぬ所と知れた。日本に着いてから大学当局からまず半年間日本語だけを学ぶようにとの通知を受けた。そうするより仕方がなく、日本語の勉強に取組んだのである。どうにかこうにか少し日本語をおぼえ、専門の勉強に進んだのであった。

留学を終えて帰国し就職した。就職先は銀行であった。業務はすべて英語で行なわれており、言葉のことでの悩まされることはない。学業は終わりになつてはいたのでしばらくの間は事もなく過ぎ去つた。ところがその頃、日本でのかつてのつながりが新展開をみるに至り、カラチのある夕飛行場で日本から飛来されるお方をお出迎えすることになった。そしてその翌日、モウラーナ（導師）の立会いのもと式を挙げた。いよいよウルドゥーを母語とする男性と日本語を母語とする女性とが夫婦の絆で結ばれることになったのである。帰國後はこれで学業も終わりになつたと思っていたのであるが、結婚によってまた学業再開ということになつた。家内にウルドゥー語を教えるということである。それまでの言語習得経験の蓄積により言葉を教えるのはさほど難しくは思えなかつたし、そのうちにだんだんやさしくなつて行つた。家内はまず日常会話のウルドゥー語をおぼえなくてはならなかつたので、そうしたやさしい言葉遣いを教えた。「これはなんですか。」「よく聞きとれなかつたのですが。」「…とはどういうことですか。」このような幾つかの表現を頼りにカラチで暮らしていたのであるが、転勤を命じられ東パキスタンへ行くことになつた。パキスタンの都会では大体ウルドゥーを話す人がいるものなのだが、勤務地は東パキスタンのそれも田舎でベンガル語を話す人しかいないようなところだった。新しい工業地帯であり、わずかではあつたがウルドゥー語を話す人たちもいることはいたので、家内は夕方、暇があれば、客人にお茶を入れるかたわらウルドゥー語の勉強をしていた。私はしばし忙しい仕事から解放されるのであつたが、實際にはどうしても私がウルドゥーを教えなくてはならぬ。時折り、こうして自由な時間…すべて「授業」に費さねばならぬとなれば、夫婦の間や家事、家庭生活に支障が生ずるのではないかと心配になる。だが、どうすればよいのやらよい考えも浮かばぬ。考案に考案した揚句、家内はもともと料理が大好きだし、パキスタン料理も習いたがつていたのでウルドゥーを話す料理人を傭えば一舉に二つの問題が解決されることを思いついた。

この思いつきそのものはなかなかよかつたのだが、そのような料理人を見つけることが並大抵のことではなかつた。ところが、大変幸運なことにそのような料理人が見つかったのである。経験豊かな料理人が見つかった。男は料理とウルドゥーを教え始めた。大成功だ。同じ給金で料理人と家庭教師の二人を傭つたようなものである。私は少し自分の時間を取戻した。というのは、それまでは家庭教師の仕事はもちろん、料理の手伝いまでしていたからである。それまでは腕のよい料理人はなかなか見つからなかつた。しかしながらそうしたよき日も長くは続かなかつた。年配で腕は優秀だったのだが、なかなか抜け目のない男だつた。しばらくするとよく利く腕前を發揮するようになつたのである。砂糖、ギー、ひきわり豆、米、たまごなどをひそかに台所から持ち出しては工場の労働者たちに売り払うようになつたのだ。事が露見したのでこの料理人兼家庭教師にはお引き取り願わねばならなくなつた。もっともその代りにベンガル人をすぐ傭い入れたが、家庭教師は見つからなかつた。こうして一年が経つてしまつた。私は家庭教師の仕事を続けた。

やがてダークーに転勤になつた。すぐにウルドゥーを話す老女が見つかった。田舎出のとても氣立てのよい従順な女中であった。独特の訛りのある言葉で田舎のことや昔のことをよく語つて聞かせるのだが、家内にはしばしば聞きとれないところがある。家内もなかなか抜け目がない。私に休み時間をくれようとしない。すなわち、女中の言葉でわからない単語や言葉遣いがあるとそれを覚えておいて仕事から帰つてきた私をつかまえではそのわけをたずねる。この女中は料理が上手だというほどではなかつた。どうにかこうにか間に合うという程度であつた。私は少しへ楽になつた。やがてこの女中は辞めて田舎に帰つて行つた。ところが、全くの天佑といふべきであろうが、すぐに代りの年老いた女中が見つかった。この女中はベンガル語を話すのだが、ウルドゥーは全然解さない。料理の問題は解決したのだが、またまた言葉を教える仕事を引受けざるを得なくなつた。またもや私は家庭教師になつたのである。住みこんでからは女中もウルドゥーを覚え出し熱心に習い始めた。その頃には家内もかなりウルドゥーができるようになつていた。

ある日のこと。私が居間でお茶を飲んでいるところへ女中がやってきて告げた。

「リヤージーサンガキタヨ。ラルキー（娘）ヲツレテキタヨ。」私が御一緒に部屋へ案内するよう言うと女中はひどく驚いた。

「ダンナサン、トテモオーキナラルキーダヨ。ソトニマタセテオイタ。イエノナカニハツレテコレナイヨ。」

さつぱり要領を得ぬ話である。一体どんな体格のラルキー（娘）なのだろうか。家の中に連れてこれないというのは、外に出てみるとリヤージーさんはパキスタンの国旗を揚げる長いラクリー（木製）の旗竿を御持参になつていたのであつた。

元大阪外国语大学講師

（古賀勝郎訳）